

ICTなど先進技術で生産性と所得を向上

JA全農は急速に変化する事業環境に対応するため、5年後、10年後を見据えて取り組みます。

耕 種

省力化や農業経営の「見える化」を革新的技術で支える

- 全自動の農業用ドローンの導入で労力軽減と生産コスト削減に貢献
- クラウド型営農管理システム「Z-GIS」の運用を始め、圃場管理を効率化



営農計画策定支援
システム Z-BFMによる経営改善支援
※本内容はイメージであり、
今後連携する内容を含みます。

畜 産

人工知能(AI)やICTで生産性を向上

- 牛の分娩兆候を監視する「モバイル牛温恵」を約2,000戸の畜産農家が導入し(2019年5月現在)、子牛の死亡事故が減少
- 人工知能(AI)を利用した「ファームノートカラー」による飼養管理の見える化で、繁殖成績を改善
- 搾乳ロボットやカメラ、ウェアラブルセンサー等、他業種の技術を導入



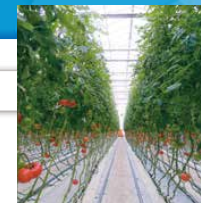
牛に装着し、活動情報を収集する「ファームノートカラー」

ゆめファーム全農

実証農場で要素技術を確立し収益向上を実現

ゆめファーム全農とちぎ

- 4年連続でトマトの出荷量40t/10aの高位安定生産を実現
- 研修生の受け入れ、視察対応等による積極的な情報発信



ゆめファーム全農こうち

- ナスの安定・多収栽培技術の実証をおこなうため、2017年に高知県安芸市に設置
- 1haの国内最大施設で、国内最高収量(30t/10a)に養液栽培と土耕栽培で挑戦
- ウェアラブル端末の実証試験中



ゆめファーム全農SAGA(2019年冬稼働予定)

- 清掃工場から排出される余剰なCO₂と熱を活用し、環境配慮型の新たな技術を導入
- キュウリの大規模多収栽培で、県内平均の倍となる45~50t/10aの収量目標を掲げる

